

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月20日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22780198

研究課題名（和文） チェンジ・エージェント間の技能伝承メカニズムに基づくストーリーテリング手法の開発

研究課題名（英文） Development of a method for the storytelling based on Technical Tradition mechanism of change agents

研究代表者

安江 紘幸 (YASUE HIROYUKI)

東北大学・農学研究科・助教

研究者番号：40508248

研究成果の概要（和文）：

チェンジ・エージェント間で技能がどのように伝承されているかを明らかにした。具体的には、農業経営コンサルタントと農業者との発話内容を記録し、サービスを受ける前後における会話の内容の変化をテキストマイニングによって把握した。また、コンサルタント主宰のOJTに参加した農家に対する意識変化については、自由記述式の質問調査をラダリング形式で実施することで核となる物語り文を限定して抽出することで把握できることを解明した。

本研究で採用した手法を適用することでチェンジ・エージェント間の技能伝承が異なるケースを類型化することができた。加えて、組織の「物語り」を聞き手である個人の関心や知識を前提としてストーリーテリング手法を適用することで、歴史性や文化性も継承できる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

This study tried to clear how the technique is being handed down in the change agents between. Specifically, it was understood by the text mining change before and after the conversation to record the utterance content and farmers and agricultural management consultant to receive the service.

It was possible to describe the different technical tradition case of change agents between. Moreover, by applying the storytelling technique on the assumption that knowledge and interest of the individual is a listener of tissue "story" In addition, the possibility that the culture of history and nature can be succession was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：農業経済学

科研費の分科・細目：農業経済学

キーワード：ストーリーテリング（物語り文）、チェンジアージェント、ナラティブ（物語り）、バイオビジネス、篤農技術、農業普及、農業経営学、実証

1. 研究開始当初の背景

近年、わが国の農業は、後継者不足や高齢

化によって、離農や農地荒廃の問題が生じ、また、農業支援機関の組織再編による広域合併によって普及指導員が削減しているとともに、地域環境保全の活動を支援するための環境対策を講じる必要など、様々な問題を抱えている。さらに、これまで農業支援機関が想定してこなかった企業の農業参入や異業種連携、各地の農家間ネットワークの形成といった新たな担い手の展開は、従来の支援活動の抜本的な改革を要請するものである。こうした農業を取り巻く情勢が著しく変化する中で、持続可能な農業を次世代へ繋ぐためには、担い手を組織的に支えるチェンジ・エージェント（Change Agent:以下、CAと略記。例えば普及員や経営コンサルタント等）同士の技能伝承が急務となっている。

また、農業に関する諸政策の展開の中で、CAに期待されていることは、企業の経営を展開する個別単位の農家や企業、さらに組織的な取り組みを行っている集落営農の経営発展を助長することである。そして、これらの活動は、地域農業の維持や農地・水・環境などの資源保全に配慮した公益的な視点が不可欠である。

特に、既往研究においては、豊富な事例を用いて、組織に蓄積された表現できない曖昧なものである勘やコツ等を伝達するメカニズムに焦点を当てて検討している。このストーリーテリングの手法は、CA間のそれぞれの出来事並びに体験及び経験を繋ぎ、道筋を立てることで個人内部の革新を促進する効果を有していることが想定される。それと同時に、CA間で共有する勘やコツを通じて、CA個人は新たな知識創造を図り、他の個人への伝達を可能とすることができ、臨床医学・社会学・経営学・教育学の分野においても注目が集まっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、チェンジ・エージェント間における技能伝承のメカニズムを解明し、ストーリーテリングの手法を開発することである。具体的には、CAの知識に基づく技能の伝承を伝える側と伝えられる側として相互関係を捉えるために、技能伝承に関する出来事を時間軸上に並べて、そのメカニズムを明らかにするとともに、道筋を立てて他の人にも伝達を可能にするストーリーテリングの手法を実証的に開発する。

課題1はテキストデータマイニング手法によるCAの技能伝承メカニズムの解明である。具体的には、CA間で技能がどのように伝承されているかを明らかにするため、文献調査ならびに実際のOJTを参与観察し、その一連の流れを把握する。また、その時々の伝承場面を一つの出来事として時系列的に整序するとともに、既往研究成果を反映し

た実証分析のための枠組みを構築する。その分析枠組みは、現場での技能伝承を実際に行っているCAの経験談を基にしたテキストデータマイニング手法を適用し、その枠組みに基づいてCA間の技能伝承メカニズムの解明を行う。

課題2はCAの技能伝承手法としてのストーリーテリングの開発である。具体的には、CA側には、熟練CAがどのように技能を習得したかをライフヒストリーに沿って明らかにする。具体的には、そのライフヒストリーに基づいて、熟練CAが農家との接点を持った当初から現在に至るまでの出来事がCAの内部に与えた影響に焦点を当て、所属する組織に対する使命感や共感・反発、取り組んだ課題等の変遷を把握する。一方、農家側には、熟練CAのライフヒストリーに沿って、出身地の思い出や伝統文化、生活様式等に関する出来事をヒヤリング調査から把握する。これらを踏まえ、CAと農家との接点を持った時から現在に至るまでの相互の出来事について、熟練CAと農家のヒヤリング調査結果、並びに、農家の作業日誌及びCAの活動記録等の文書記録情報を総合して、熟練CAから未熟練CAへの技能伝承するための手法としてストーリーテリングを開発する。

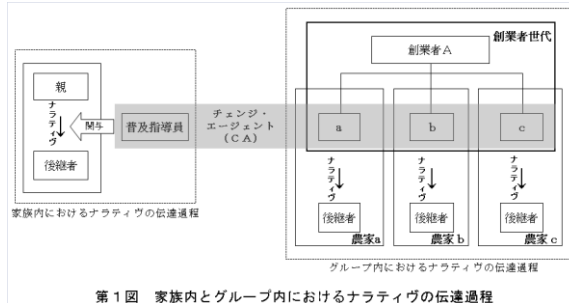
こうした当初の課題を解明するにあたり、次の2つの研究目的を設定した。

第1は、グループ経営内において創業者の無形資産を後継者世代へ伝達する人材をCAとして位置づけ、その関与が無形資産の伝達過程にいかなる差異を生じさせるかを実証的に明らかにすることである。なお、経営主の無形資産それ自体を把握することは困難を要するため、接近視角として、創業者の経験（知識・記憶・出来事）を積み重ね、時系列的に整序した歴史的経路≒「ナラティブ」が、CAの関与を通して後継者世代へどのようにして受け継がれているかに焦点を当てる。ここでは、便宜的に、「ナラティブ」=複数の出来事を時間軸上に並べてその順序関係を「語る」「語られた物語り」という行為両方を同時に含意しているとして定義する。ちなみに「ストーリー」はナラティブに筋立て（因果律）が加えられたものである。

第2は、創業者Aの無形資産の伝達過程において普及指導員がCAとしていかなる役割を担うことができるかについて検討することである。ここでのアプローチの特徴は、家族内とグループ経営内におけるナラティブの伝達過程と、そこでのCAの役割の類似性に焦点を当てる点である。これを模式的に示した図1において、家族内では親から子（後継経営者）へ一子相伝の様にナラティブが伝えられるが、そこでの親子二者関係による限界を補完するものとして、第三者である普及指導員がCAとして関与する。

本研究では、創業者Aが構築した無形資産をグループ傘下農場の経営主であり、いわばグループ経営の創業者世代が後継者世代に伝達するということを想定している。

つまり、網掛け部のグループ傘下農場の経営主（以下、創業者世代）a, b, c をCAとして捉えている。



第1図 家族内とグループ内におけるナラティブの伝達過程

3. 研究の方法

(1) 研究対象の概要

研究対象とするグループ経営G社は、全国に85の傘下農場（全て法人化した家族経営）と2つの直接農場を有している。

その特徴は、第1に傘下農場の種豚・畜舎・飼料を統一して生産技術の平準化を図り、第2に生産・財務の情報をシステム化することで内部化し、第3に経営資源を相互に補完する形で取引費用を抑え、家族農業経営の持続可能性を拓いたことである。

しかし、本研究との関連で見ると設立時の1983年から規模拡大によりイノベーションを実現してきた創業者世代にとっては、創業から27年間様々な実践を通して蓄積した無形資産を如何にして次世代へ継承するかが経営の継続性という観点から課題となっている。

(2) 調査概要と分析方法

調査は、G社創業者Aを含む創業者世代と後継者世代を対象にして、経営継承に関連する質問紙調査を世代別に2009年11月と2010年11月の二度に分けて実施した。

調査項目は、既往研究に基づき経営継承の要件となり得る質問18項目を設定した。評価にあたっては、①自社農場へ就農する契機となったか、②自身の経営感覚を向上する契機となったか、③自農場の経営を継承する契機となったかという3つの基準を設定した。集計は、それぞれの項目を5段階尺度法による評価してもらった値を検定し、経営継承に対する世代間の意向の相違を検証した。

また、G社創業者世代と後継者世代のナラティブを把握する方法としては、G社が主催する8つの主要な催事を選択してもらい、①選択の理由、②自分にとって重要な理由、③自農場の経営にとって重要な理由、④参加して変化したことを自由に記述してもらった。

そして、創業者Aのナラティブが、創業者世代であるCAの関与を通して後継者世代へどのように受け継がれているかをテキスト解析によって検討した。

なお、ここでは、創業者Aの講演録やインタビューにおいて繰り返し自社の理念や強み、独自性が語られた発話内容を比較検討する際の指標として用いた。必要なデータの収集にあたり、後継者を確保している創業者世代の48戸に対しては、G社より該当する傘下農場リストを提供等に協力をしてもらいFAX調査を実施した。分析に用いたデータ数は、創業者世代30名（創業者Aを含む）、後継者世代22名の計52名であり、世代の対応があったサンプルは19戸（創業者A親子を含む）であった。

4. 研究成果

(1) 世代間におけるナラティブを共有する方法の差違

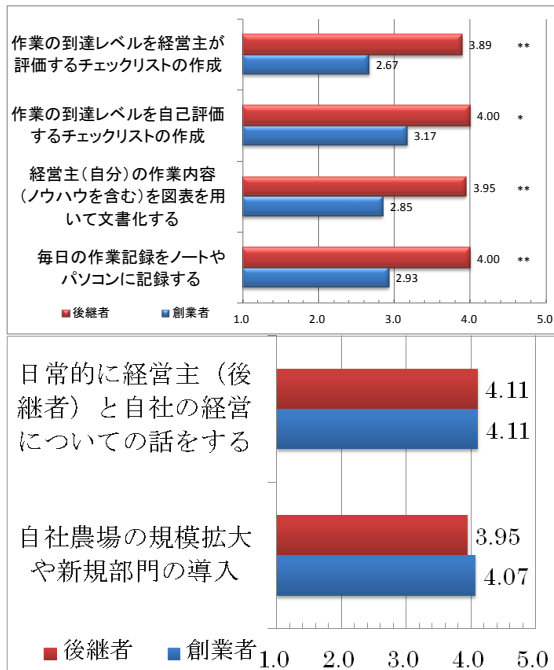
まず、第2図をみると、創業者世代と後継者世代において差が確認できた項目は、毎日の作業記録や作業内容の記録する、作業の到達レベルを評価するチェックリストの作成である。逆に差がほとんどない項目は、自社農場の規模拡大や新規部門の導入、日常的に経営主（後継者）と自社の経営についての話をするである。

これらのことから、幼少のころから体験を持って創業者世代から学習しつつも、後継者世代が科学的なデータ主義の傾向があり、逆に創業者世代は、直観的な傾向がある。また、G社の経営発展を支える傘下農場の規模拡大や組織風土というべきコミュニケーションについては、世代間で差がない可能性が読み取れる。つまり、グループ経営の強みである生産・財務データ共有といった核なる部分は、継承しつつも、経営の意志決定に際しては創業者世代とは異なる意識が後継者世代に醸成されていることを示唆している。

(2) 後継者世代が共有するナラティブ

次に、後継者世代の特徴語をSPSS Text Analytics for Surveys 4の形態素解析機能を用いて解析した。この結果を見ると「財務の事を勉強して経営を見る」「生産成績の向上・維持も大事だが会社の財務を知る事が大事だから」「同じような考えをもっているなかがいると思うと生産・財務の勉強をしようと思う」「腹を割って話が出来関係の構築」「グループとして活動していくにあたり、何より、意識の共有と強固な団結力が必要だと思うから」であった。

また、創業者Aについて、「直接真近で話を聞くことができる機会なので」「G社のいままでと、今後進む方向等の話、内容なので」といった回答が得られた。



第2図 ナラティブを共有する方法に関する差違の結果

この結果から仲間意識や財務に対する勉強姿勢、そして、グループとして交流することの必要性を認識していることが分かる。加えて、創業者Aに対する回答から畏敬の念を有している可能性があることが分かる。これらのことから、後継者世代は、創業者Aのナラティブを創業者世代の関与を受けて聴きつつも、前世代と異なる方法でG社全体の進むべき方向を模索していることが考えられる。

(3) 創業者世代が共有するナラティブ

次に創業者世代の特徴語を先と同様の方法で抽出した結果を表2に示した。この特徴語を用いた原文を見ると、「経営は多くの方の知恵や知識を取り入れ、その中でも創業者Aの影響は最大と見ています」「創業者Aの方向蓄積データの分析、財務の指導は全部つながりがある」「世界の情勢や畜産の動向がわかる」「いつも創業者Aの話聞くのが楽しみです」「自分の経営体だけで不可能な分野(流通・販売)をグループで行えるから」であった。この結果から、同世代の創業者Aをイノベーターとして認識しつつも、社会的距離が近い同志としても認識していることがわかる。加えて、世界標準で業界の動向や自身の経営状況を客観的に分析評価し、積極的にグループ経営の強みを活かしている一方で、家族農業経営の生き残りについて危機感を頂いている。

以上のことから、創業者世代は、創業者Aが常に指摘している財務の重要性を漠然としていたことを超えて認識できる「自覚」の

状態に至っていることが確認できる。

(4) 考察

以上の結果を踏まえ、次の2点の考察ができる。

第1に世代間における創業者Aのナラティブの伝達過程に相違があったが、後継者世代と創業者世代との大きな違いの要因には、創業者Aとの接触頻度や影響度合いの相違によるものが考えられる。当然、創業者世代は創業者Aとの社会的距離が近いために、創業者Aの影響を強く受けているために、CAとして関与しても相互に作用しない可能性を示唆している。

第2にCAの関与が必ずしも創業者Aのナラティブをそのまま後継者世代へ受け継がせるのではないことを示唆している。それは創業者Aのナラティブの受け手である創業者世代の修正がかかる点であり、新たなナラティブを創発することにより語り手の創業者Aも変化するという相互作用である。

これらを普及との関連で考察すると、CAの関与は創意工夫の余地に気づかせるといった変化を普及対象者へもたらす可能性が指摘できよう。また、そのことは比較的経験が浅い普及指導員でも後継者や新規就農者の課題解決を支援するCAとしての役割を期待できるものである。

(5) 結論

本研究では、グループ経営においては、創業者Aの無形資産を創業者世代がCAとなり、後継者世代に伝えていることを明らかにした。ただし、それはそのまま伝達されているのではなく、傘下農場の後継者が幼少のころに経営主が身体を伴わせて伝えていること、また、研修等の「場」がナラティブを伝達手段として利用し易く変化させ、創業者Aの無形資産を伝達することの可能性を明らかにした。

つまり、人が参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、共通の体験をする状況が「場」であり、CAが関与して無形資産を伝達可能にするための要件でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 安江紘幸, 平口嘉典, 長谷部正, 蠱惑的女性をシンボルとした新たな農業・農村像追求の可能性, 農村経済研究, 査読無,

30(2), 2012, pp.46-51.

- ② 小賀坂行也, 安江紘幸, 震災からの営農再開に対する農業者の意向と支援ニーズの把握—宮城県仙台東部地域を事例にして—, 2012 年度農業経済学会論文集 (農業経済研究別冊), 査読有, 2012, pp199-206.
- ③ S. Kitani, H. Yasue, and S. Oyamada : An Alternation of University Students' Philosophy of Life after 2011 East-Japan Great Disaster Linking to Students View of Science and Technology, Health and the Environment Journal, vol.3 (3), 査読有, 2012, pp.36-45. URL:<http://www.hej.kk.usm.my/pdf/HEJVol.3No.3/Article06.pdf>
- ④ 安江紘幸, 公共視点と個別視点を統合した農家参加型普及サービスによる農業支援機関と住民との地域協働, 環境科学会誌, 査読有, 24(4), 2011, pp.353-362. <http://agriknowledge.affrc.go.jp/RN/2010814215.pdf>
- ⑤ 安江紘幸, 長谷部正, 伊藤房雄, ネットワーク型農業経営組織の経営継承に関する一考察—グローバルビッグファーム(株)ニューリーダーの会を事例にして—, 2010 年度日本農業経済学会論文集 (農業経済研究別冊), 査読有, 2010, pp.134-141.

[学会発表] (計6件)

- ① 安江紘幸, 篤農技術の評価とその伝播過程に関する一考察, 平成 24 年度日本農業経営学会宮崎大会, 2012 年 9 月 22 日, 宮崎大学
- ② 安江紘幸, 企業的農家の公共的な経営活動の評価に関する一考察, 日本環境共生学会第 15 回学術大会, 2012 年 9 月 2 日, 北九州市立大学
- ③ 安江紘幸, チェンジ・エージェントが関与する無形資産の伝達過程—ナラティブ・アプローチを援用して—, 平成 23 年度日本農業普及学会春季大会, 2012 年 3 月 2 日, 東京三会堂ビル 9 階石垣記念ホール
- ④ 安江紘幸, 平口嘉典, 解題と各報告内容の位置づけ, 2011 年度東北農業経済学会特別セッション, 2011 年 9 月 3 日, 秋田市
- ⑤ 安江紘幸, 公共視点と個別視点を統合した農家参加型普及による住民との地域連携, 2010 年度環境科学会第 32 回全国大会企画シンポジウム, 2010 年 10 月 16 日, 東洋大学白山キャンパス
- ⑥ 安江紘幸, 長谷部正, 伊藤房雄, 組織構成員の世代間における無形資産の継承過程—ナラティブ・アプローチを適用して—, 平成 22 年度日本農業経営学会研

究大会, 2010 年 9 月 18 日, 秋田県立大学秋田キャンパス

[図書] (計3件)

- ① 長谷部正・伊藤房雄・安江紘幸・小賀坂行也・畠山琢磨, (株)家の光出版総合サービス, 広域合併の見直しと今後の戦略的農協経営のあり方に関する研究 (『協同組合奨励研究報告 第三十八輯』全国農業協同組合中央会編), 2012, pp.9-54.
- ② 安江紘幸, 朝倉書房, 農業経済学分野の文献調査法 (『農学・生命科学のための学術情報リテラシー』齋藤忠夫編著) 2011, pp.63-73.
- ③ 安江紘幸・山田崇裕・門間敏幸, 農林統計出版, 冷害克服対策としてのほうれんそう生産の発展と限界 (『山村の資源・経済・文化システムとその再生の担い手—久慈市山形町の挑戦—』門間敏幸編著), 2010, pp.75-90.

[その他]

ホームページ等

<http://www.agri.tohoku.ac.jp/agriecon/japanese/kankyo/index-j.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安江 紘幸 (YASUE HIROYUKI)
東北大学・農学研究科・助教
研究者番号: 40508248